

のようにこっけいであった。

エレクトロニクス関係の若い乗組員から「ドクターユダを知っているか」と質問を受けた。「ドクターウダのことか。」という、「皆、ドクターユダだと言っている。日本から数年前にナナイモ生物研究所へ来て講義をした偉大な海洋学の教授のことだ。」というので宇田先生のことだとはっきりした。宇田先生は、ナナイモの市井の徒の間でも極めて有名で、驚くことがしばしばある。

非常に楽しい観測の日日だったので、一週間の調査期間は、アッという間経ってしまった。下船の時、日本の慣習通り、ブリッジの船長に挨拶に行くと、始め驚いていたがすぐ大いに喜び、「ぜひ又、乗船して下さい。」と握手を求められた。カナダでは、研究者は下船の時も普通挨拶に行かないものだと後で聞いた。

6 山口県定置網漁撈長、船長研究会に出席して

小川 嘉彦（山口県外海水試）

山口県の日本海沿岸の定置網で直接海と網と魚群を相手に仕事をしている漁撈長、船長クラスの人達の研究会が昭和42年12月12日に萩市で開かれた。この会は水試の藤井泰司研究員の努力が実ってはじまったもので今回が2回目という新しい会であるが、この会に出席したので席上漁業者の方々が語ってくれたブリ漁況の話など聞いたままここに記し、御参考に供したいと思います。

1. ブリは沿岸を南下（または北上）してきて定置網に入るのではないように思われる。むしろ何かの原因で沖合から差し込んで来て定置網に入る。
2. 定置網で漁獲されるブリには回游群と瀬付群と2群存在する。回游群は体長、体重等大きさがそろっているが、瀬付群は大小いろいろ混ってばらつきが大きく、イワシ類を追って入網する場合が多い。量的には回游群が多い。
3. 釣でブリが獲れる時には定置網には入らない。逆に定置でブリが獲れる時には釣でとれない。
4. 定置網に入るブリの大きな魚群は空胃の状態のものが多く、何か食べているものは網を揚げるときはき出すのでわかる。食べているものは、冬にはイカ類、春にはカタクチイワシ、キス等が多い。
5. 冬のブリは滞留期間が短かく足が速い。春漁の方が漁の続く場合が多い。
6. 漁が続くか続かないかは漁場付近の地形（例えば湾の大きさ等）にも関係する。
7. 冬のブリ漁は北西の風の時に好い。春のブリ漁については特に風について言わない。
8. 潮流に対する風の影響は大きく、漁場付近では底層まで風潮が流れる。西風のときは満潮が長くかつ強く流れ、北風の時には干潮が長くかつ強く流れる。
9. 普通には干潮時にブリの入網が多いように思われる。
10. キレシオー大潮の終り一頃に漁が好い。大潮時には漁獲が少ないがこれは網成りが悪くなるため大潮の時には魚群はよく動く。
11. シケの前にはシケジオ（流向不安定なかなり強い潮流）が流れ瀬付の魚が多く入網する。
12. 網に入ったブリは潮上にのぼるようである。

13. 網に入ったブリはイカ類を追い出す。イカの多い時にはブリはみられない。
14. ブリは年々少なくなっている。特に韓国ブリ（11月に漁獲される15Kg前後の特大群で、名称は大きさからきているらしい）はこの7～8年ほどみられない。
15. ブリの漁況には3～4年の周期があるように思われる。
16. 現象 — 特に11月を中心をめずらしいアジが延50～60箱漁獲（江崎漁場—北部—）された（12月下旬江崎から送られた標本について水試で同定したところ、このアジはメアジ属の *Trachurops macrophthalmus* (Rüppell) と思われる）。
17. 漁業者の要望—水試・水研の人は机の上で本ばかり読んでいようだがもっと出歩きそして海と魚をもっとよく見てもらいたい。

7 海洋学的漁場関係の新知見

宇田道隆（東京水産大学）

1967年9月～10月スイスのIAPO（国際物理海洋学会）と西独ハンブルグのICES（国際海洋探究会議）に出席した。

1. 基礎的な水産海洋新知見

現在国際学術連合の国際地球物理及び測地学連合に所属するI.A.P.O.はI.A.P.S.O.（International Association for the Physical Sciences of the Ocean 国際海洋物理的科学協会）と改名された。近い将来に International Union of Marine Sciences（国際海洋科学連合）に発展する決議があった。世界の海洋測地学 Marine Geodesy, 地形地質精査が新たに要請せられた。国連総会で1966年12月“海洋の資源”（Resources of the Sea）の決議が通過し、1967年12月海底資源開発調査の決議が続いて通った。FAO（ACMRR, COFI）では世界食糧開発指標案を採択した。1968年夏ラホヤで南太平洋調査のシンポジウムが開かれることになった。FAOは常置水産海洋センターになろうとしている。海況予報のため変動度（Variability）のシンポジウムが、物理的、生物学的の両面について盛んになってきた。自動ブイ観測とテレメタリング、大気-海洋相互作用研究など益々盛況で、海洋からの大気へのエネルギーは主たるものということが判ってきた。観測については0～2,000m深までS.T.D.を盛んに使用し、水塊微細層重などを明らかにし、さらに流速はO₂, P, N, のごとき化学要素も自記できる測器が開発され、大型化一途の観測船上の資料を電子計算機で処理、海洋図は自動等水温線描面機によって描かれ、ガルフストリーム流軸200m層15°C線自動追跡により与えられ、一方数値予報は、流体力学的モデル海洋実験、海流の力学的数値計算など盛んな基礎的準備時代の研究の発表がなされた。波浪図の作成、波浪予報の進歩と共に、津波及台風等に関する気象潮、気象潮流、風成および密度（温塩）複合大循環論が試行的にいくつか出て来た。人工衛星は写真（カラーも）でガルフストリーム渦動の消長、流線パターンの統計にまで及んでおる。筆者はインド洋季節風の影響について開かれたシンポジウムに招かれて出席講演したが、アラビア海方面では特